

西欧文学との出会い

——ジェイムズ・サマーズと東京開成学校の英文学講義——

川戸道昭

日本の学校で初めて西洋文学に関する専門の講義がおこなわれたのは、一体いつ頃のことであつたらう。夏目漱石が大学でディクソン教授の教えを受けた明治二十年代の初めのころか、それとも二葉亭四迷が外国語学校に在籍した十年代の後半か。否、その時期はもっと早く、坪内逍遙が東京大学に学んでいた明治十年前後にまで遡る。明治十年に開校された東京大学ではその当初から文学の講座が設けられ、坪内逍遙ら草創期の近代文学の担い手たちがそれを受講していたことが、今に残る様々な史料から確認できる。そればかりか、時代はさらに遡つて、明治七、八年の東京開成学校（東京大学の前身）においても、あるいはそれ以前の開成学校（明治六年）においても、すでに同様の講座が存在し専門の外国人「教師」による西洋文学の講義が行われていたと、当時の各種『年報』は伝えている。

明治十年以前というのは、いまだ人々の関心が西洋の文学にまでは及んでいなかった、西欧文学受容史上のいわば黎明期である。輸入される文学書の数も限られていて、それが読まれたという一つのあかしでもある翻訳文学作品の数もほんの数えるほどにとどまっていた。そのような時代に、わが国の学問の軸を担う東京開成学校ではすでに西欧文学の講義が始まっていたのである。しかも、驚くことに、その講義の中にはシェイクスピアなど英文学屈指の古典も含まれていたと、当時の東京開成学校の史料は伝えている。もしそれが本当だとすれば、これは日本の近代文学史上見逃すことのできない重要な問題である。われわれはその講義の内容を精査することによつて、これまで解らない点の多かった草創期の西洋文学の受容の実態に光を投げかけることができるのである。一体、当時の東京開成学校では、誰が、どのようなテキストを用いて、どのような西欧文学の講義を行っていたのか。それを聴講した学生はどのような人々で、その講義から彼らはどうのような文学上のインスピレーションを得ることになったのか。さらには、それらの学生がわが国の近代文学の創造上果たした役割は一体どのようなものであつたのか。さいわい、当時の東京開成学校の史料の中には、そのような疑問を明らかにしうる年次報告や図書館の洋書

目録が残されている。本稿では、そうした史料を基本に、その講義を聴講した人々の証言やそのころ日本に輸入されたと思われる原書なども参考にしながら、黎明期の欧米文学の受容の全体像に迫ってみることにする。

一 本邦最初の英文学講義

文学教師ジェイムズ・サマーズ

東京開成学校というのは、人も知るように、江戸以来の学問の主流であった。時代の荒波に晒されて幾度となく名称や組織の変更を余儀なくされたが、他の学校に先駆けて西洋式の教育システムを導入し、外国人教師の確保にもそれなりの力を傾注していた。明治七、八年の段階で、これと同じ程度に洋学の受け入れ態勢が整っていた学校があったとすれば、それはせいぜい福沢諭吉の率いる慶応義塾か全国の七都市に点在した英語学校^①ぐらいではなかったか。しかし、慶応義塾は、周知のとおり、実学志向の強い学校であり、文学のような実益性の乏しい学問は閑却されるのが常であった。各地の英語学校の方も、外来のリーダーに出てくる文章をとおして文学作品の断片に触れることはあつても、いまだ西洋文学を独立した学科目として扱うまでには至っていなかった。ということ、明治十年以前に西洋文学に関する専門の講義を行える状況にあつたのは、結局、江戸以来の学問の主流、東京開成学校をおいて外にはなかったというのが、私なりに史料を漁りて得た一応の結論である。

それでは、東京開成学校では一体いつのころから、西洋文学の講義が行われるようになったのか。先に、私は東京開成学校以前の開成学校(明治六年)時代にはすでに存在したと^②したが、その根拠は同年の『文部省年報』に掲載された科目表にある。その年、専門学校に格上げされ、校名も明治元年当時の開成学校と改められた同校の科目表には、「諸芸学校」(「学校」は今でいえば学科に相当)の「予科三年下級」の授業科目として、「文学／作文」が設けられ、週に三時間が同科目に充てられていたことが記録されている。「諸芸学校」というのは、仏語学生を対象とした学科で、担当の外国人教師はすべてフランス人、したがって「文学／作文」を受け持ったのも当然フランス人教師であつたと考えられる。

一方、これとは別に、同年の学科目表には「文学」担当の外国人教師がさらに三人存在したという記録もみえる。すなわち、「法・理学校」所属の「文学数学教師 英一人」、「化学文学教師 英一人」と「文学教師 英一人」の三名である。この年の「法・理学校」の外国人教

師は全部で五人とあるから、実に半数以上が「文学教師」の肩書きをもっていたことになる。ところが、奇妙なことに、「法・理学校」の学科目には、とくに「文学」と銘打った科目はどこにも見当たらない。おそらく、その謎を解く鍵は、「語学」の授業にあったと思われる。つまり、「語学」の中の一つの柱として「文学」が教えられていたのである。それは、明治七年の科目表の「英語学」が、「文学」(リテラチュール)と「書写及説話ノ実試」(ブックチス、イン、ライチング、エンド、スピーキング)の二つに分けられている、というのをみれば大方察しがつくだろう。両「学校」の「予科」、とくに「法学校」の「予科」では「語学」は最重要科目の一つとなっていて、たとえば「第一級」(予科の最上級)では一週に二十四時間あった授業のうち、実に三分の一の七時間が「語学」の授業に充てられるほどであった。その最も重要な「語学」における柱の一つが「文学」であったと考えるならば、全部で五人しかいない「法・理学校」の外国人教師のうちの三人までが「文学」の肩書きを持つ教師であったという人員構成上の偏りも納得が行くのである。

ともあれ、明治六年当時の開成学校には、英、仏、合わせて四人の「文学教師」がいたことになるが、それらの教師は実際にどんな人物であったのか、残念ながらその手がかりとなるようなものは同年の科目表には見出だせない。しかし、明治六年の科目表には見出だせないが、それを明治七、八年の同類の史料と重ね合わせてみると、その教員像もある程度浮かび上がってくる。たとえば、明治七年の『東京開成学校第二年报』に掲載された「外国教授現員表」⁽⁴⁾には、その年に在職した外国人教員の担当「学科」と「月給」、「人名」「国名」が載っている。その中で「学科」が「文学」となっている教員は全部で三名あり、それを順に書き出してみると、「ジョンストン 英(文学 百五十円)」、「ソーマルス 英(文学 三百円)」、「リユー 仏(文学算術 二百円)となっている。当時のお雇い外国人関係の史料を参考に、これら三名の教員のフル・ネームと東京開成学校の在職期間を示すと、最初の「ジョンストン」は、Thomas Johnston⁽⁵⁾といい、明治六年四月八日雇い入れ、同八年一月に病死している。次の「ソーマルス」は、同様に James Summers⁽⁶⁾といい、明治六年十月八日から同九年八月三十一日まで在職。最後の「リユー」は Auguste Rioux⁽⁷⁾という名のフランス人、就任の年月は明治七年三月でフランス文学担当となっている。

この三名の中で、とくに文学と関わりの深い人物は、二番目のジェイムズ・サマーズである。彼が、明治六年の六月にロンドンにおいて駐英日本国公使・寺島宗則と交わした英文の雇用契約書を見ると、そこにははじめて「For the appointment of the said James Summers, as Professor of English Literature and Philosophy」⁽⁸⁾とこうように、はじめから「英文学および哲学」の「教授」として招聘された教師であることが明示されている。(因みに彼以前に「英文学教師」として雇われた外国人教師は、当時の開成学校関係の教員名簿を調べてみると一人もいない)。重久篤太郎氏の『日本近世英学史』の伝えるところによれば、サマーズはかの「岩倉大使の一行が英京に至るに会し、その

招聘をうけて「日本に送られたという注目すべき人物であり、受け取る月俸も「三百円」と、当時の一般外国人教師の俸給としては最高の部類であった。彼がそれなりの期待のもとに日本に送り込まれた「英文学・哲学教授」であったということは、そうした雇用の経緯や条件からも判断できるのである。そのサマーズが開成学校に着任したのが明治六年十月八日、すなわち同校の科目表に「文学」の科目名と「文学教師」四名の記載が現れる年であった。おそらく、その符合は偶然の一致ではなかったであろう。開成学校当局としても、わざわざ政府の要人を煩わせてリクルートした文学・哲学教授の講義を、『年報』などを通して広く内外に周知させていくぐらいの戦略は当然描いていたと思われるのである。

このように、明治六年の後半ともなると、西洋文学の講義を担当することを目的として採用された専門の教員が開成学校の教壇には登場してくる。そうした文学講師が、わけても本邦最初の「英文学教授」となったジェイムズ・サマーズが、開成学校および東京開成学校の場で講じた「文学」とは一体いかなるものであったのか、またそれを聴講した学生に及ぼした影響はどのようなものであったのか、その内容を詳しく検証してみることにする。

明治七年度の英文学講義

明治六年の科目表には、前章にも述べたとおり、「文学」の肩書をもつ教師が四人いたという記載があるが、果たしてその「文学」とは現在われわれがいう「文学」と同じ意味のものであったのか。ことによると、それは「文章」を学ぶ学問、すなわち「語学」と同様の意味で用いられたという可能性も考えられなくはない。つまり「文学数学教師」「化学文学教師」というのは、専門の数学や化学のほかそれぞれの母国語である英語やフランス語を教える外国人教師の謂であったという解釈も成り立つのである。

しかし、明治六年の段階では、意味がいま一つはつきりしなかった「文学」ではあるが、サマーズが年頭より教壇に立った明治七年には、間違いなくそれは現在の「文学」と同義・同内容のものとして理解されるようになる。そのことを示す証拠の一つが、先にも紹介した、同年の科目表である。そこには、「予科二年の「英語学」の授業細目として、「文学」と「書写及説話ノ実試」の二項が明記され、「文学」の横にはちゃんと「リテラチュール」とルビまで振つてある。そういう点から判断して、これが今日一般にいう「文学」と同じ内容であったことはおそらく間違いないものと思われる。サマーズが担当したと想像される、その明治七年の「文学」こそは、東京開成学校における最初の本格的な「文学」の講義であったばかりか、日本においても最も早い西洋文学講義の一つとして注目に値するものである。

では、そこで講じられた「文学」とは一体どのようなものであったのか。残念ながら、その内容を今に伝える文献は何も残されていない。少なくとも、これまで多くの研究者はどのように考えてきたし、私自身、明治七年度の東京開成学校の文学講義の内容を明らかにする文献・史料を目にしたことがない。しかし本当にそうだろうか。明治七年度の文学講義の内容を伝える史料はどこにも残されていないのか。そう思っている当時の書物を渉漁しているうちに、意外にもその通説を覆すような事実が、明治八年の英文『東京開成学校一覽』以下「一覽」と省略)の中に見つかった。その文献ならずで『日本近世英学史』の著者・重久篤太郎氏が言及しているではないかという反論も聞かれそうだが、私のいうのは、新しい史料ではなくて、そこに示されている新しい事実のことである。つまり、それを根拠に、明治七年度の文学講義の内容をおおむね捕捉することが可能になるような事柄がそこには明示されているのである。

さっそくその『一覽』の記載事項によって明治七年度の文学講義を検証してみようと思うが、その前に一言、当時の『一覽』の性格と内容について簡単に触れておく必要がある。『一覽』(英語で *Journal* と *Calendar*) とするのは、同校の学生や教員にその年の講義内容や日程を周知させるために発行された年間の予定表であり、年度の初めないしは途中で刊行されるのを常とした『一覽』とならんでよく引用される当時の資料に『東京開成学校年報』というのがあるが、それは年度の終了後に発行される文部省宛ての報告書であり、発行の時期が『一覽』とは半年ないし一年ほどずれている。したがって記載内容にもそれだけの時間差があるわけで、われわれが両史料を利用する際に絶えず念頭に置いておかなければならないのはその時間の差である。『一覽』の内容をもう少し詳細に記すと、そこには、学年暦、教員名簿、履修規則、図書の利用案内、新年度の科目とシラバス(講義の摘要)、前年度の学年末試験問題、学生の名簿など、当時の講義の内容を知ることには有益な情報が多数掲載されている。さらにいえば、『一覽』には、日本語と英語の二種類があり、授業の内容を検証する上で欠かせないのは、英文の『一覽』の方である。われわれはそれによって、外国人講師の掲げる原文のシラバスに直接触れることができるばかりか、日本語版の『一覽』にはない学年末の試験問題をも確認することができるのである。

ともあれ、その明治八年の英文『一覽』をもとに、サマーズの英文学講義の内容を検証してみると、まず、そこに掲げられている彼の講義要項は次のとおりである。

ENGLISH LITERATURE AND LOGIC.

James Summers, Professor.

The course in English Literature extends through the second and third years of the general course.

The chief objects aimed at are, to give to the student a control of the language as a means of pursuing his studies, and to put him in possession of those principles of criticism which will enable him to appreciate the Literature of the English tongue.

The preceding year, the first of the general course, is employed to give the student a sufficient knowledge of the grammatical and rhetorical laws of the language. The course during the second year consists in a systematic reading and study of the standard English authors. The leading facts connected with the lives of the great authors, and the characteristics of the prominent literary epochs, are studied. The students are required to practise literary composition regularly. Essays, abstracts, and criticisms are prepared by them in connection with their studies.

The third year is occupied partly with a course on Literature, and partly with a course in deductive and inductive Logic. The practice of literary composition is continued.^(a)

以下にその日本語訳を掲げる。

英文学及び論理学 シェイムズ・サマーズ教授

英文学は普通科の二年次三年次を通して学習される。おもな目的は、学習を遂行する手段としての英語力を養成すること、英語で書かれた文学を鑑賞するのに必要な批評の原理を身につけることである。

前年度(の例)、普通科の一年次は、英語の文法と修辭法を学習する。

二年次はイギリスの代表作家の作品を系統だてて購読・研究する。偉大な作家の生涯に関する主要な事実や文学上とくに顕著な時代の特色について学ぶ。作文が常時課される。学習した内容についてのエッセイ、要約、批評が求められる。

三年次は、文学と演繹法・帰納法の論理学に当てられる。作文の練習が續行される。

この文章で注目しなければならないのは、中ほどの「the preceding year (前年)」という言葉である。前述のとおり、『一覽』というのは、年度の初めないしは途中に発行される年間の予定表であるから、ここにいう「前年」とは、当然、明治七年度(明治七年九月から八年八月)と理解されなければならないところだが、従来の研究では、一律これを明治八年の講義として扱ってきた。なぜそのような扱いをしてきたかという点、それには一つ大きな理由があつた。すなわち、この時代の学校暦は九月に始まり八月に終了するものであつたにもかかわらず、明治九年以前の『一覽』は、それを無視して、暦どおりの一月から十二月までの事柄を掲載しているために、学校暦の上からみると、七年度の出来事と八年度の出来事が一つの『一覽』のなかに並存するという混乱が生じてしまつてゐる。多くの場合、一いちの記載事項には年次区分の決め手となるものが示されておらず、どちらの年度にも振り分けることができないために、従来やむをえずそれを一律明治八年の出来事と扱ってきたという次第である。しかし、上に掲げた講義細目の場合は、たまたま「前年度(の例)」という時期が明示されていることから、それが明治七年度の講義細目であると推定できるわけで、私が新しい事実の発見といつてゐるのは、外でもない、そうしたコンテキストのなから明らかにされる年次区分をとおして判つてきた新事実を指しているのである。

ともあれ、上記の講義要項は、「前年度(の例)」という言葉を境にして、それ以前に記されている事柄が明治八年度の指導方針であり、それ以降の事項が、明治七年度の講義細目という、大変まぎらわしいものであるが、その中でわれわれがとくに注意を傾ける必要があるのは、後半の明治七年度の講義細目中の、第二年度の記載事項である。そこには、学習される内容とその教育方針とが明示されており、当時の文学講義の実態をうかがう上で大変貴重な資料といえるだろう。今その柱とするところを、簡単に要約してみると、だいたい次の四点到まるとめることができる。すなわち、(一)英文学作品の系統だった購読・研究、(二)伝記や文学史の学習、(三)作文、(四)学習した内容に関するエッセイ、要約、批評、の四点である(これらのことがすべて英語で行われたという点にも留意したい)。教育程度としては、現在の大学の英文科をも凌ぐものであつたと思われるが、問題は果たしてどこまでそれが実行に移されたかということである。

それを確認する最も有効な方法は、以上の講義細目を、前述した英文の『一覽』中に掲載された学年末試験と対比してみることだろう。そこに掲げられた試験問題は、大変都合のいいことに、先ほどの講義細目と同じ明治七年度に実施された試験問題である(標題の「Final Examination 1874-5」という文字によつてそれは確認できる)。しかも、すべては外国人講師が出題したままの原文(英・米人の教師の問題は英語、フランス人、ドイツ人のそれは仏、独語)による試験問題であり、当時の講義の実態を知る上では願つてもない原資料である。学校当局としても、その試験問題の掲載には相当の重きを置いていたらしく、明治八年の英文『一覽』は、全文一七六頁のうち、実に二分の一

弱に当たる七二頁がそれに割かれている。

その中で英文学と名のつく試験問題は、「普通科」(予科)最上級の「第一級」(三年)の「English Literature」と同じく「第二級」の「English Language and Literature」の二つで、いずれもサマーズが出題した問題。先ほどの明治七年度のシラバスに書かれた学習内容と比較してみると、年次ごとの対応関係は必ずしもはっきりしないが、試験問題そのものは、授業内容との間にかなりの一致点が見出たされる。たとえば「普通科」最上級の「第一級」の「English Literature」におおむねサマーズが出題した問題は次のようなものである。

1. Distinguish poetry from prose, and name some kinds of each.
2. What is the Drama, and what influence had it upon English Literature?
3. Give a short history of the Drama in England. Who wrote the first English Tragedy? Give an analysis of the first two acts of it.
4. What influence respectively had Chaucer, Shakespeare and Milton on English Literature?
5. Why is Shakespeare held in such high esteem? and why is Spenser less read than Shakespeare?
6. Give the characteristics of these writers and those of Milton.
7. Write ten lines from Hamlet's address to his father's ghost, and paraphrase a few lines.
8. Explain the expressions:—
 "I find thee apt."
 "The whole ear of Denmark."
 "Is by a forged process of my death / Rankly abused."
 "The serpent that did sting thy father's life, / Now wears his crown."
 "Taint not thy mind, nor let thy soul contrive / Against thy mother aught."
 "The glowworm shows the matin to be near, / And 'gins to pale his ineffectual fire,"
 "Remember Thee!"

“Ay! thou poor ghost! While memory holds a seat / In this distracted globe.”

“I’ll wipe away all trivial fond record, / All saws of books.”

9. Whence did English literature get its highest inspiration? From what events, traditions or circumstances?

10. Mention the names and works of six eminent writers of the eighteenth and nineteenth centuries.⁽¹⁰⁾

前と同じように以下に日本語訳を掲げておく。

- 一 詩と散文の違いを述べ、それぞれの例を数例挙げよ。
- 二 劇とは何か、またそれは英文学にいかなる影響を与えたか。
- 三 イングランドにおける演劇の歴史を簡単に述べよ。最初に英語の悲劇を書いたのはだれか。その最初の二幕を分析せよ。
- 四 チョーサー、シェイクスピア、ミルトンはそれぞれ英文学にどんな影響を与えたか。
- 五 シェイクスピアはなぜかくも高い評価を受けているか、またスペンサーはなぜシェイクスピアほど読まれないのか。
- 六 それらの作家の特徴およびミルトンの特徴を述べよ。
- 七 ハムレットが父の亡霊に呼び掛ける台詞を一〇行引用し、そのうちの数行をパラフレーズせよ。
- 八 次の表現を説明せよ。〔引用文は上の英文参照〕
- 九 英文学はどこから最大のインスピレーションを得たか。いかなる出来事や伝統、環境からそれを得たのか。
- 一〇 一八、一九世紀の著名作家六人の名前と作品を挙げよ。

これらの問題を読んで、まず気がつく特徴は、文学の本質やその変遷に関わる全般的な質問が中心となっていて、個別の作品に関連する質問は、たとえば、「詩と散文の例を数例挙げよ」とか、「英語で書かれた最初の悲劇の二幕を分析せよ」というように、どちらかという付随的なものにおわっていることである。つまり、これらの試験問題から推し量れるサマーズの文学講義というのは、先ほどの講義細目ではないならば、(二)の偉大な作家の伝記や文学史の学習を中心としたものであったということができそうだ。西洋文学の何たるかをまったく知

らない学生に文学を教えるには、まず文学とはなにか、過去の偉大な作家が残した文学とはどのようなものであったのか、という大きな視点から問題を捉えていく必要がある、個々の作品はその流れに即する形で教えられるという方法がとられたものと思われる。これは、当時の日本の学生に文学を理解させる方法としてはきわめて妥当な方法で、彼らはそれによって英文学の歴史の概要とその歴史を形づくった著名作家の作品例をいくつか頭に刻みこむことができたのである。

このようにサマーズの授業というのは文学史上の大きな流れを中心としたもので、たとえば『ハムレット』のような作品を一つ選んでそれを最初から最後まで読み通していくという作品講読の授業とはまったく性質を異にするものであった。なるほどそこには『ハムレット』の台詞も取りあげられているが、それはたった十行ほどの台詞の断片にすぎず、作品全体の精読に真つ向から取り組んでいたという証拠にはならない。たとえサマーズの文学講義に、週七、八時間が充てられていたとしても（詳しい時間は記録が残っていないので分からないが、仮に全体の四分の一ほどの時間が費やされていたとしてもそれぐらいの時間である）、当時の学生がそうした大作家の作品と正面から取り組むのはほとんど不可能に近かった。その理由は二つある。第一に、彼らには、欧米文学の古典の精華ともいえるべき作品とまともに向かい合えるだけの文学上の基礎知識も語学力も備わっていなかった。そして第二に、それを読もうと思うにも、それらの作品の原書が日本にはいまだ充分に入ってきていなかったのである。

それではサマーズは一体いかなる書物を教科書に用いて文学の講義をおこなっていたのか。結論からいうとそれには二種類のものがあつたと考えられる。すなわち一つは英文学史であり、もう一つは英米文学の文例集 (specimen) である。個別の作品は仮に用いられたとしてもおそらくごく例外的であつたらう。それを裏づける何よりの証拠として私が注目するのは、明治八年に発行された『東京開成学校文庫書目 英書之部』⁽¹⁾である。本書目は明治八年当時、東京開成学校が所蔵していた英書のリストで、一つ一つの書物の後には所蔵冊数が明記され、なかには数冊、数十冊といった重複書物もすくなくないところから、基本的にこれが当時の開成学校の教科書・参考書のリストであつたと考えていいものである。その目録を調べてみても、シェイクスピアやミルトンなどの個別の作品は一冊も見当たらない。あるのはただ、「文学」の項目の「文学史(History)」、「文例集(Specimens)」という二つの部門に掲げられた数冊の文学史関係の書物と文例集(多数の作家の文章を一書に収めた作品集)のみである。「文学」の項には、「文学史」、「文例集」の外に、「読本(Reading Books)」、「随筆ほか(Essays &c)」という二部門があるが、そこにはサマーズの講義と直接結びつくような文学関係書目は見当たらないところから、この「文学史」および「文例集」部門における数冊(正確には十種類)の書物の中にこそ、サマーズの使用した英文学のテキストがあつたと考えるのが自然であろう。具

体的にそれがどのような書物で、彼の文学講義とどのように関係していたのか、その詳しい分析については章を改めてじっくり行ってみることにしたい。

二 テキストと教育法

明治八年度の文学講義と使用テキスト

ということで、本章では、サマーズの文学講義のなかでも、とくにテキストと教育法という二点を取り上げて考察を進めてみることにする。彼の文学講義をできるだけ長期的かつ多面的に捉えていくために、ここでは、検討の対象年次を一年進めて明治八年度の講義としたい。明治八年度というのは、サマーズが東京開成学校で教鞭を取った最終年度であり、その講義の中に彼の個性が遺憾なく発揮されていくばかりか、それを伝える資料の方も以前より充実して、われわれとしてもかなりの精度で彼の講義の実態を確認することができるのである。

そこで、まずは明治八年の『東京開成学校第三年報』⁽¹²⁾に掲載された学科目から紹介してみよう。その「普通科(＝予科)」「第二級甲」の履修科目は次のようなものであった。

英語	作文	修辞	アンダルワード氏	学	チチコック氏	
物理学	無機化学	英国史	幾何	代数	算術	画学

以上の表から確認できることは、この年にそれぞれの学科で使用された教科書名である。ここには煩わしいので一部省略したが、英語、作文、修辞、画学を除く七科目には右横にそれぞれ使用された教科書名が記入されていて、そのうちの文学の教科書は、「アンダルワード氏(文学)」となっている。同じように「第三級甲」のクラスにおいても、十三科目中の一科目として「文学」の授業が設置され、その教科書として「モルレー氏(文学)」が使われていたと記されている。

早速、前に紹介した『東京開成学校文庫書目 英書之部』により、これらの書物を確認してみると、まず「アンダルワード氏(文学)」の方は、「文学」の項の「文例集(Specimens)」の中に「UNDERWOOD'S Handbook of English Literature……」⁽¹³⁾とどう記載があり、もう一方の「モ

ルレー氏(文学)は「文学史(History)」の項に「MORLEY'S First Sketch of English Literature……26」という書名がある。末尾の数字は、所蔵冊数を示し、アンダーウッドの該書は一冊、モーレーの方は二十六冊、それぞれ同文庫に所蔵されていたことになる。外にアンダーウッド、モーレー⁽¹³⁾の書物は見当たらないところから、これら二書が基本的に明治八年の文学の教科書であったと考えていいものである。

では、そのアンダーウッドの「Handbook of English Literature」(以下『英文学集』と表記)とは、あるいはモーレーの「First Sketch of English Literature」(以下『文学史』と表記)とは一体いかなる書物であったのか、まずはその書物の確認から始めよう。最初に、モーレーの『文学史』のだが、本書については、様々な文献・目録を調べてみたものの、確かな手がかりとなるようなものは何も掴めなかった。明治十年の『東京大学法理文学部 図書館英書目録』をみると、H. Morley の名のもとに同書が記載されているところから、例の坪内逍遙が『小説神髓』の中でそのジョージ・エリオット論を援用している「如(ジョン・茂(モ)ルレイ)とは別人のモーレーであることは判るのだが、肝心な H. Morley の「First Sketch of English Literature」という書物は現在国立国会図書館などにも所蔵されておらず、内容については一切不明である。

それに対し前者のアンダーウッドの方はどうかというと、こちらは現在も国会図書館などに所蔵されており、書名・内容ともに完全にわたわれの調査の及ぶ範囲にある。早速、同図書館に出向いて本書を調査してきたのでその結果を報告すると、まず書名は、東京開成学校の『文庫書目』にあるとおり、「A Hand-Book of English Literature」。ただし、そのあとに、使用の程度として「高等学校用(Intended for the Use of High Schools)」という文字が続く。著者の名前は Francis H. Underwood、発行はボストンの Lee And Shepard⁽¹⁴⁾ ほか一社である。発行の年は一八七七(明治十)年とあるが、これは重版で、版權登録は、一八七一(明治四)年、「Lee And Shepard」となっている。本書は、坪内逍遙の『当世書生氣質』などにも名前が登場する有名な書物であり、早くから様々な分野の研究者により注目されてきたが、そのわりには正確なところが知られていないので多少詳しくその出版事項をしるしておいた。

ともあれ、これによって当時の使用教科書の一方が確認できたわけだが、特筆すべきは、この『英文学集』が「文学」の項目の中でもとくに「文例集」のセクションに属する書物であったということである。前章にも述べたように、サマーズの授業というのは、文学の本質や歴史の変遷を大きな流れの中で捉らえていくことに重点が置かれ、個々の作品はその流れとの関連で、断片的に取り上げられるというのが特徴であった。文学の教科書が、それぞれ「文学史」と「文例集」のなかから一篇ずつ選ばれているというのも、まさにそうした授業形態を裏づける一つ

の証拠として注目していいものだろう。そのうちの「文学史」はともかく、一方の「文例集」の書物が特定できたということは、当時の文学の実態を探る上では大変大きな意味がある。本『英文学集』の内容を明治八年度の試験問題と照合することによって、どのような作品がどのような形で学習されていたのか、それを詳細に検証していくことが可能になるのである。

学年末試験とアンダーウッドの『英文学集』

そこで、早速、明治八年度の文学講義とアンダーウッドの『英文学集』の関係について調べるために、まず、明治九年の英文『一覽』に記載された試験問題(明治九年七月実施、すなわち明治八年度の学年末試験)に目を向けると、そこには「英文学」と名のつく問題は全部で四種類掲載されている。その対象となった学年とクラス名は、「普通科」最上級の「第一級」、その次の「第二級甲」、同じく「第二級乙」、および「第三級甲」の四クラスである。出題者はいずれもサマーズで、そのうちの「第二級乙」組の試験問題は次のようなものであった。

- 一 「学問について“Studies”に関するエッセイを書け。(後略)
- 二 「バロウ(Barrow)に従つて「ワイト」の定義をせよ。(後略)
- 三 以下をパラフレーズせよ。
Bring with thee / Nods and becks and wreathed smiles, (後略)
- 四 「アレグロ」(L'Allegro)におけるシルトンの狙いは何か。その抜粋を記せ。ただし以下の語に関する彼の表現を用いること。
Melancholy, Mirth, Liberty (以下数語略)。
- 五 次の表現を説明せよ。Cynsure, chequered, shade, rebus, junkets, Friar's lantern (以下数語略)
- 六 アディソンに倣つて、サー・ロジャール・ドゥ・カヴァリーの描写をせよ。とくに友人、召使、牧師、小作人との関係を描写せよ。
- 七 「マーザの幻影」の抜粋を記し、その隠喩(メタファー)を指摘し、全体の寓意(アレゴリー)を説明せよ。
- 八 イギリス作家の異なる文体を挙げ、それぞれの特徴を述べよ。⁽¹⁰⁾(後略)

それぞれの問題には一部省略したところもあるが、以上が「二級乙」組に課された試験問題のすべてである(原文は英文)。これらの問題

を一目みて、出典がすぐに特定できるのは、作者名の記された二、四、六ぐらいだろう。ところが、驚くことに、これをアンダーウッドの『英文学集』と照合すると、八番目の文体に関する問題を除いて、すべての問題の出典が簡単に特定できるのだ。すなわち、一はフランシス・ペイコンの『随筆集』中の「学問について」、二はアイザック・バロウの「ウィット」という随筆、三、四、五がいずれもジョン・ミルトンの「アレグロ」の一節、そして六、七がジョセフ・アディソンの『スペクテイター』からの抜粋、という具合である。要するに、アンダーウッドの『英文学集』と取り上げられている作品も同じ、抜粋の場合は抜粋された箇所も同じということで、完全に同書が「第二級乙」組の試験問題の出典であったことが双方を比較照合することによって判然とするのである。

では、ほかのクラスはどうだろう。同じようにアンダーウッドの『英文学集』がテキストとして用いられていたのだろうか。それを確認するために、今度は予科最上級の「第一級」の試験問題を例に引いてみよう。すなわち、同学年に課された「英文学」の試験問題は次のようなものであった。

- 一 文芸復興期以降の主要なイギリスの作家を二〇名挙げよ。(後略)
- 二 「学問について」Studies」に関する短いエッセイを書け。ペーコンは学問についてどんなことをいつているか。(後略)
- 三 ミルトンの「アレグロ」について説明せよ。ミルトンの作品は英語にいかなる影響を与えたか。(後略)
- 四 ミルトンの次の語に対する修飾語句を挙げよ。 Mirth care Liberty light dawn smiles echo dinner darkness. (16)

これも出典を特定するのに時間はかからない。一は文学史、二はペイコンの「学問について」、三、四がミルトンの「アレグロ」からの出題である。要するに、「第二級乙」組の試験問題同様、一問を除くほかは、すべてアンダーウッドの『英文学集』に載っている作品からの出題である。

これらのクラス以外の問題も、出典はほとんどアンダーウッドの『英文学集』と、おそらくはモーレーの『文学史』の二つであったとみることができのだが、そのなかで、上に取りあげたのとは異なる傾向の問題を二点ほど紹介しておく、まず一つは、「二級乙」組の試験に、他とは違って米文学に関する問題が取りあげられていることである。それも、課された問題は、すべてアメリカ文学関係の問題で占められるというほど、徹底した出題ぶりである。例によって、最初の二問は、「アメリカの歴史や詩歌等における重要な作家十二名を挙げよ」といった文学史の類に属するものだが、外の五問はウィリアム・E・チャニングの「ミルトン論」、ワシントン・アーヴィングの『ニッカボッカのニューヨーク史』か

らの一節、それとロングフエーの「人生の詩」というようにアメリカ人作家の短篇や抜粋を題材としたものである。しかも、注目すべきことに、それらはみなアンダーウッドの『米文学集』に由来するエッセイや詩であった。アンダーウッドの著書には、前には触れなかったが、『英文学集』の姉妹編として『米文学集』⁽¹⁷⁾（一八七二年刊）があり、それがこの年になって新たに教科書として加えられることになったのである。アメリカ文学というのは、その当時イギリス文学の一部と見なされる傾向が強かったせいも、それが単独で日本に受容され始めるのは明治も二十年代以降であったというように、よくいわれるが、少なくとも東京開成学校においては文学講義の開始される当初からこのように一クラスの学年末試験がすべてアメリカ文学で占められるほど、盛んな受容・研究がなされていたとなると、われわれとしても固定観念を捨て、新たな見地からアメリカ文学の受容の歴史を捉え直してみる必要に迫られることになるだろう。

以上のことに加えてもう一点、明治八年度の試験問題に関して、是非ともここで触れておかなければならない重要な問題がある。それは、「第三級乙」組と同じく「第三級丙」組の、「文学」ではなくて「英語」の試験に、トマス・グレーの『墓畔の哀歌』(Elegy Written in a Country Churchyard) が出題されていることである。このグレーの『墓畔の哀歌』は、先に掲げたロングフエーの「人生の詩」(“A Psalm of Life”) とともに、明治期に爆発的な流行を見た西洋の詩の一つで、サマーズの授業は、そうした流行のきっかけをつくったものとして大変注目される。同時に、それは明治十五年に井上哲次郎らによつて世に問われる『新体詩抄』中にも翻訳が掲げられていることから、わが国の文学界に及ぼしたサマーズの授業の影響を論じる際に、必ず問題にされなければならない重要な作品である。本稿でも、その件はのちに詳しく取りあげる予定でいるので、ここではこれ以上触れずに、ただ「第三級」の二つのクラスの「英語」の授業でそれが講読されたという事実を指摘するにとだけにとどめておく。

サマーズ式英語教育法

以上、サマーズの試験問題をアンダーウッドの原文と照合することによつて、ますますはつきりしてきたのは彼の英語教育法上の特徴である。それを、一言でいうならば、徹底した精読・暗誦主義の英語教育ということになるかと思う。彼がテキストに用いたアンダーウッドの『英文学集』というのは、英文で六〇〇頁余にも及ぶ大著ではあるが、そこに取り上げられているのは十四世紀から十九世紀までの英文学史上名高い文学者のほとんどすべてということで、一人一人に割かれている紙数は、せいぜいが数頁から十数頁にすぎない。ということは、サマーズが問題に取りあげているのは、わずかに二、三名の作家であるから、それを全部合わせても、せいぜい二、三十頁といったところである。そう

した限られた範囲のなかから、ミルトンの「アレグロ」のような好篇を選んで、じっくり暗誦するまでに読みこなしていく、それがサマーズ式英語教育の基本であった。

これは単なる私の推測ではない。サマーズ自身そうした教育方針を表明しているのである。彼は、札幌農学校の一年生に英語を教えたときの報告書(明治十三年度)の中で、次のようなことをいっている。

The common error is to advance the student by rapid steps to new matter before the old has been fully mastered.

For this reason the committing to memory from time to time passages from good authors has an important and invigorating effect on the minds of students of language. ⁽¹⁹⁾

《とかく陥りがちな間違いは、一つ事が充分に理解されないうちに次の事項へと生徒を駆り立てていくことである。それゆえ、語学を学ぶ生徒には、時折、傑れた作家の文章を暗記させることが肝要で、彼らにやる気を起こさせるのに効果がある。》

サマーズには、東京開成学校時代の「申報」(自らの授業の報告書)が残されていないため、この札幌農学校当時の授業の概要報告は、自身の言葉でその教育方針が語られているほとんど唯一の文章として、大変注目されるものである。ここから推測できるのは、彼の東京開成学校当時における授業もおそらく札幌農学校時代と同様、独自の教育方針に基づくものであったということである。いまその教育方針を簡単に要約してみると、こういうことになるかと思う。すなわち、大事なのは、「傑れた作家」の文章を選んでそれを急がずに徹底的に朗読、暗誦せしめることだ、と。こうしたサマーズの教育方針を裏づける資料として、当時札幌農学校で実際に彼から英語を習った生徒の証言が残されているので、それを紹介しておく、たとえば、そのうちの一人、武信由太郎(のち早稲田大学教授)は、次のように言っている。「入学後一年位して今のサンマース嬢のお父さんが同校へ見へましたが、中々文学の素養のあつた方で、同氏から私共はマコーレーの *Lays of Ancient Rome*、ゴルドスミススの *The Deserted Village* やグレーの *Elegy* などを盛んに暗唱させられた。又教科書としてはアンダーウィッチの *British Writers* の講義があつた。……それから科外として朗読 (*elocution*) や討論 (*debate*) が時々催された。*elocution* には頭本氏がシーザーのアントニーをやつたのと、自分がデ・クエンシーの一文をやつたことだけを記憶して居る」。⁽¹⁹⁾ 同様なことは志賀重昂の「札幌

学日記」の中にも語られている。すなわち、「明治十四年十月十五日／＼マッコーレーの『ホラチウス』行の西詩を『サンマース』氏の前に誦す、
「同十一月十七日／＼サンマース氏と事あり、『グレー』の『エレジー』を同氏の教授にて始む」云々と。要するに、サマーズは「申報」どおりの
授業を、札幌農学校の教室で行っていたということが見て取れるのである。

この「傑れた作家」の文章を取り上げて、それを徹底的に朗読、暗誦させるというやり方は、おそらく東京開成学校当時の授業にもそのまま当てはまる彼独自の教育方法であつたと思われる。彼が、札幌農学校で教えたのが東京開成学校を去つたわずか四年後のことであつたこと、あるいはそこで取り上げた作品がいずれも短編で、なかにはグレーの『墓碑の哀歌』など東京開成学校で読まれたのとまったく同じ作品もあるということ、さらには先ほどの試験問題の内容などから判断して、まずそれは間違いないものと思われる。

では、サマーズがどのように模範文の「朗読」と「暗誦」を重んじる狙いは一体どこにあつたのか、それを確認するために再び彼の報告書に注目してみよう。

One hour in the week was devoted to elocutionary exercise in the repetition of some good passage from an English classical author. By this means the class has been familiarized with standard style in English. Their pronunciation has thus improved, and they have, I trust, caught something of the rhythm a spirit of the language.

《週に一時間は英文学の古典作家の傑れた文章をくりかえし朗読する訓練に当てられた。これによつて生徒は英語の模範的な文体に親しみ、発音が改良され、英語の真髄ともいふべきリズムのなにかを理解したものと確信する。》

これを先ほどの試験問題と重ね合わせてみるならば、サマーズの英語・英文学講義の実態が浮かび上がってくる。つまり、彼がミルトンの「アレグロ」を取り上げる真の目的は、そこから抜き出した詩の一節を生徒に「くりかえし朗読」させ、それによつて、大作家の模範文に親しませ、「英語の真髄ともいふべきリズム」を体得させるということに あつた。そのことは彼の試験中にみえる、「アレグロ」におけるミルトンの狙いは何か。その抜粋を記せ」という問題からも推察できる。このような問題は、基本となる文章の朗読・暗誦を前提としてはじめて成立する問題といつてことができるのである。

こうした朗読・暗誦中心の文学の授業は、われわれ現代人の目には多少変則的な授業のように映るかもしれないが、近代の黎明期に生きる当時の若者にとつてはそれなりに有効な授業であつたと思われる。彼らは、傑れた作家の模範文章を朗読・暗誦することによつて、英語と日本語の間に存在する言語構造のちがいを肌で感じ取っていくことができたのである。やがてそこから、英語のスタイルやリズムに対する感覚、アクセントへの関心、日本語との音声構造の相違に関する意識が芽生える。それを意識するなかから新しい演説法がうまれる。新しい詩歌の試みが生じる。新しい演劇における感情表現の模索が始まる。井上哲次郎らの新体詩創造の試みや、坪内逍遙の演劇刷新運動にみるように、それまでの日本に存在しなかつた西洋起源の自己表現法や感情表白法へと至る道が、それによつて開かれていったのである。このように、サマーズの英語教育が近代日本の文学界に投げかけた影響には、われわれ現代人の想像を越える大きなものがあつたが、この問題については、第四章に詳しく取り上げる予定なので、ここでは以上のことを指摘するだけにとどめておきたい。

三 最初の受講者

サマーズの文学講義を一通り通覧したところで、今度はそれを受講した学生の方に目を転じてみると、まず明治九年の『一覽』に掲載された在籍者名簿のうち、後に各方面で名をなす人物には次のような人物が含まれていた。

法学	下級	高橋健三		
化学	下級	磯野徳三郎		
普通科	第一級	増島六一郎	千頭清臣	西松二郎
同	第二級甲	山崎為徳		
同	第二級乙	福富孝季		
同	第三級甲	船越哲次郎	元田肇	和田垣謙三
同	第三級乙	坪井九馬三	都筑警六	加藤高明
同	第三級丙	高橋鉉太郎		加納伸之助
				天野為之

この在籍者名簿を前年の明治八年の『一覽』に掲載されたそれと比べて判然とするのは、学生の等級・クラスが、「普通科(Ⅱ予科)」「第三級」に属する数名(彼らは明治八年八月で廃止になった第四級からの進級者)を除いて、まったく変わっていないことである。つまりこれは、明治八年の『一覽』に掲載されたのと同一年度内の名簿であり、しかもそこには「七月の試験の成績順に名前を列記した」と書かれていることから、明治八年度の学年末試験(九年七月実施)が終了した時点の名簿であったと考えられる。『一覽』に記載する事項を、この年から学年暦に合わせて九月から八月までの一年間の出来事と改めたために、期せずして同一年度の名簿が八年と九年の『一覽』に載るという変則的なことが起こったものと思われるが、われわれにとってはこれが大変都合がいいものとなる。というのも、この名簿を先に掲げた学年末試験と照合することによって誰がどのような試験を受けたか、すなわちどのような授業を受けたかということの特定が可能になるのである。たとえば、増島六一郎(英吉利法律学校初代校長)のいた「普通科第一級」はアンダーウッドの『英文学集』、山崎為徳(同志社大学教授)の「第二級甲」組は同じく『米文学集』の試験(Ⅱ授業)というぐあいである。この明治八年度の名簿と学年末試験の関係は、本章で取りあつかう主要テーマとも密接に関係してくる問題なので、あえて冒頭に掲げて注意を促したという次第である。

さて、それではこれらの学生の立場から見た、サマーズの授業とは、あるいはその人となりは、一体どのようなものであったのか、それについては、この表の「普通科 第三級甲」組に名前の見える船越(のち井上と改姓)哲次郎が、明治四十三年に「余が記憶に存せる二三の英国人」という一文をものして、次のように思い出を語っている。

《劈頭記憶に浮ぶのは開成学校時代の教師たるサンメルス氏である。この人は明治六年十月八日より同九年八月三十一日まで在職して凡二年十ヶ月、まア一寸三年間在職したのである。私等は、この人に歴史文学などを教つた。このサンメルス氏は中々の博学の人で余程文学の趣味があつた。……授業法に就いては別にこれぞと云ふ特色もなかつたやうだけれども、さう云ふ文学趣味のある人の事として其の教授も面白く感ぜられた。文学者といふものは概して癖のあるものだが、このサンメルス氏も余程癖があつた。室の風通の工合などにひどく心配したやうで少し寒い風が来ると心配し、ストオヴの火が強過ぎるとこれ又心配するやうな余程寒暖に神経をいためるやうな気味があつた。けれども私等特殊に自分は氏に知られてよく問題を出された。多くの人の中で私の名を呼んでよく問ひ掛けた。》⁽²⁴⁾

サマーズという人物は、この井上の文章にもみられるように「余程文学の趣味があつた」人物で、その文学趣味がたんに井上ばかりか、それを聴講した東京開成学校の外の生徒の、さらには日本全体の「文学趣味」の掘り起こしに大いに資するところがあつた。たつた一人の文学趣味が、なぜそれほどまでに大きな影響力をもつことになったのかということだが、それを考えるには、上記の名簿に記載された学生たちに目を向けないわけにはいかない。彼らは、全国各地から選り抜かれたいわば知的エリートであり、学校を卒業した後は文字通り日本の近代化を促進する牽引車となつて各方面をリードしていった。近代文学の領域においても、彼らがサマーズによつて植えつけられた「文学趣味」を、さらに一歩押し進めて、日本全体の小説や詩歌改良の動きへとつなげていく重要な仲立ちとなつていった。その最も顕著な例は、ここに文章を引用した井上哲次郎である。井上は、彼を可愛がつてくれたサマーズの影響によるものだろう、明治十五年にロングフローの「人生の歌」を訳出して『郵便報知新聞』に掲載する⁽²⁵⁾。それは、同じ年に彼が選者の一人となつて出版された『新体詩抄』にも再録され、日本に「新体詩」ブームを巻き起こすきっかけとなつたことは世の文学史上つとに有名である。

しかし、それだけではない。彼らは、こうした直接の創作活動に加えて、近代日本文学の成立を可能にする読者の開拓とその質の向上にも大きく資するところがあつたのである。上の学籍簿を一目見てわかるように、ここに名前のある生徒は、のちに何らかの形で中等・高等教育に関わつていった人が少なくない。たとえば、井上哲次郎、和田垣謙三、坪井九馬三は東京帝国大学、千頭清臣^{ちかみきよおみ}は東京大学予備門、高橋鉦太郎は第三高等学校、嘉納伸之助(治五郎)は学習院(のち高等師範学校校長)、天野為之は東京専門学校、山崎為徳は同志社といったことくである。サマーズの文学講義を直接聴いた生徒の数は百人、二百人と限られたものではあつたが、その後全国の教場に散つた彼らをとおして文学趣味を鼓吹されていった生徒の数は数百、数千にも達したと想像される。それによつて文学を創り出す作者ばかりか、それを受け容れる読者の側の質も大いに向上し、近代文学の成立に必要な文学環境が整えられていったことはいふまでもない。われわれは、このように彼らが果たした文学的「伝道者」としての役割にも充分注意を向けなくてはならないだろう。

実際、彼らの果たした役割がどれほど重要なものであつたか、それを検証するために、サマーズの教え子の中から二人を選んで、日本の教場に文学趣味が伝播していく様子をうかがつてみることにしよう。

第一に取り上げるのは、東京開成学校に一年ほど在籍し、その後京都の同志社に転じた山崎為徳の例である。山崎は安政五(一八五八)年、陸中水沢の生まれ。若きより才学の誉れが高く、斎藤実(のちの総理大臣)、後藤新平とともに水沢藩の三秀才と謳われた。十六歳にし

て郷里をあとにし、一旦東京に身を置いたのち、熊本洋学校に学び、そこでかのジェーンズについて英語その他の学科を修める。それから再び上京して、東京開成学校に入学するわけだが、そのときの経緯を、柳田泉の「同志社教授 山崎為徳先生」⁽²⁶⁾は、こうしている。「明治九（一八七六）年（或いは十年ともいう）上京して、開成学校に入学したが、入学に際し一年跳んで上級に編入された。才学優秀、つねに級の首位を占めていた」と。この記事を先の名簿と照合して、確認、ないしは訂正すべきことが三つある。まず、山崎の東京開成学校入学の年は、明治十年ではなくて九年（それも定期試験の実施された七月以前）であったということ。そして、「一年跳んで上級に編入された」というのは、正確にいうと普通科最上級の「第一級」ではなくてその下の「第二級」であったということ。さらに、「級の首位を占めていた」というのは、文字通り「第二級甲」組二十九名中一番の成績であったという三点である（本名簿は七月の定期試験の成績順であると断わり書きがあり、山崎の名前はその筆頭に掲げてある）。ともあれ、山崎は一年跳んで「第二級」に配属されたにもかかわらず、そこでも二十九名中一番の成績を取るほどの秀才であった。

しかし、どうしたわけか、彼は翌明治十年に横井時雄らとともに東京開成学校を去り、同志社に転じてしまう。その理由について、田中啓介編の『熊本英学史』には、「山崎為徳は、洋学校を終えて後開成学校に学んだが、ここに失望して、横井時雄らと京都に下り、新島襄の門下に入った。彼らが開成学校に失望したということも、熊本洋学校の水準の高さを暗に示していると思われる」と、山崎が東京開成学校の教育水準に不満を覚えたとも受け取れるような旨が記されているが、それは正しくない。山崎が同校を去ったのは、学問への不満というよりは、むしろ彼らの信奉した宗教に対する周囲の不寛容さに大きな原因があった。そのことについて、明治九年九月に東京開成学校に入学した三宅雪嶺は、次のような興味深い回想を残している。

《自分の入学した時、寄宿舎の階下に椅子等を置き、階上に寝台を置き、上と下とで人の配当が違ひ、山田一郎、藤田四郎、大屋権平といふやうなのが自分と上も下も同じ、けれど寝台に三年上の岡倉角三が居り、一年上の横井時雄もゐた。横井が耶蘇信者といふので、寝室であちらこちらから耶蘇攻撃が出て、時として随分喧しく、中には悪戯するものもあり、或日横井が改まつていふやう、「分ぬことがあつたならば先生に聞いて来て説明するので、余計なことを言つてもらひたくない」と。久しからずして横井は退学した。》

これは当時の官立学校の一部に存在したキリスト教に対するネガティブな空気をうかがう上で大変興味深い記事だと思うが、横井とともに同校を後にした山崎の心にも、こうした同僚学生の心ない仕打ちにくすぶる思いがあったのだろう。彼は、旧師ジェーンズが帰国するに際して行った「神のために一身を捧ぐべき」だ⁽²⁹⁾という説得に応じて、同志社に転じる決心をする。

しかし、同志社には移ったが、山崎にとつて東京開成学校における講義がすべて無益に帰したというわけではない。とりわけ彼がサマーズから受けた英文学の講義は、その後の彼の文学研究に資するところも少なくなかったのである。山崎が同志社を卒業して母校の教壇に立つたとき、そこで取り上げた文学者は、シェイクスピア、ミルトン、テニソンなどであったというが、それらはいずれもサマーズの文学講義とも関係の深い文学者であり、なかでもミルトンについては、サマーズが最も力を入れて講じた詩人であったことに注目したい。「アレグロ」におけるミルトンの狙いは何か、「チャニングはミルトンをどう評価しているか」、山崎はサマーズが繰り返し問いかけるこれらの質問に真正面から取り組んでいた。「二年甲組」二十九名中一番の成績をおさめたというのは、何よりその証拠となろう。山崎の教授就任が弱冠二十二歳であった点⁽³⁰⁾を考慮にいとると、東京開成学校時代の「アレグロ」や「コーマス」の朗読・暗誦、さらにはウィリアム・チャニングの「ミルトン論」の精読等が、確実に彼の文学知識の一角を占めるものであったことに疑問の余地はないのである。

山崎は、ミルトンを好み、よく学生を散歩に連れ出しては『パラダイス・ロスト』の詩句を暗誦して聞かせたという。教室にあつては、「詩歌至上主義」を説き、学生に「詩から神に往け、……真の神によらなければ、真の詩は作れない。詩と神とを一身に摂して、最も優なるものは、ダビデ、ダンテ、ミルトンである」と論⁽³¹⁾した。その教えが基礎になつて生まれてくるのが、湯浅吉郎(半月)の長篇創作詩『十二の石塚』(明治十八年)であつたと、柳田泉は指摘する(前掲「同志社教授 山崎為徳先生」)。この指摘をもつて直ちに、湯浅、山崎と遡つて、サマーズの文学講義に結びつけるのは、いかにも安易にすぎるといふものだろう。そこには当然、湯浅や山崎個人の資質、とりわけキリスト者としてのそれが大きく作用していたと考へなくてはならない。同じ影響のことをいふのならば、山崎の熊本洋学校当時から師であつたジェーンズの方がはるかに大きなものがあつたはずだ。しかし、それにもかかわらず、そうした大きな影響とあいまつて湯浅の創作活動を可能にした要因の一つに、サマーズのミルトン講義が挙げられるというのもまた紛れもない事実であつた。東京ではサマーズの文学講義がきっかけとなつて井上哲次郎らによる新しい詩歌創造の試みが生まれる(井上らの試みは湯浅のそれより三年先行)。そして京都では、その井上とともにサマーズの文学講義を聴講した山崎がさかんに詩歌の講義・朗読を奨励していく。個々の創作活動が、そうした社会全体の文学創造の機運と決して無縁でないことを思えば、サマーズの講義と湯浅の創作を一つの線で結び付けることも必ずしも不当には当たらないことに合点がいくのではない

だろうか。

さて、山崎のことはこれくらいにして、もう一人、というよりはもう一グループ、日本の読書界に西洋文学を定着させる上で大変重要な役割を果たしたと思われる人々を紹介してみよう。もう一グループといったのは、彼らはみな東京開成学校時代の親しい仲間で、卒業後はお互いがお互いを刺激しあう形で西洋文学の普及に貢献していったからである。ともあれ、そのグループの中心に存在した人物の名前を挙げると福富孝季、先ほどの名簿でいうならば普通科の「第二級乙」組に所属した人物である。福富は安政四（一八五七）年、高知の生まれ。東京外国語学校を経て、明治八年に東京開成学校に入学する。その後東京大学の文学部に進み、明治十三年七月に同学部を卒業している。翌十四年より東京師範学校に奉職し、途中二年間の英国留学によるブランクはあったが、明治二十四年四月、三十五歳という若さで亡くなるまで、同校で後進の育成に当たったという経歴の持ちぬしである。この福富が、日本の学生で最初に西洋小説に親しんだ者の一人であったことは、東京大学で彼の二年後輩に当たる高田早苗が『半峰昔ばなし』という書物の中で次のように語っているのをもてわかる。

《我々は当時の大学生中自分達のみが西洋小説読みと思つて居ると、或日小川町辺の牛肉屋へ登つて飯を食つて居ると、隣席に岡倉
覚三、福富孝季の両君が居た。此の二人は我々よりも二学年の先輩であつて、談偶々西洋小説の事に及ぶと、岡倉君は頻りにキク
トル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』の話をする。又福富君はヂューマの『モント・クリスト』の話をし出した。私も負けぬ気で、スコットの『アイ
ワンホー』の略筋を語り、互に頗る興味を感じたのであつた。西洋文学、殊に其小説を日本の学生が読み始めたのは其頃からだと
(cog)
思ふ。》

福富孝季という人物は、ここにもあるように、当時の学生の中では最も早く西洋小説に親しんだ人物の一人であつたが、おもしろいのは、その時分、東京大学内には同時に二つの「西洋小説読み」のグループが存在して、それぞれ別個にそれを楽しんでたという点である。高田もいうように、日本の学生が「西洋文学、殊に小説」に親しみ始めたのはその頃が最初であつたとなると、われわれはこの「牛肉屋」会談にいたるまでの両グループの西洋小説との出会いをもう少し詳しく振り返つておく必要があるが、さうだ。

まず一方の高田のグループであるが、その中心にいたのは高田と「同窓」の丹乙馬という学生であつた。この人物があるとき偶然、図書館で西洋小説を読んだのがきっかけでやみつきとなり、高田にもしきりにそれを読むように勧める。元来が小説好きで『八犬伝』や『三国史』に

通曉していた高田は、勧められるままに、夜店で偶然見つけたスコットの「ウェイヴァリー・ノヴェルス」などを読んでみると非常に面白い。これほど面白いものはないと思つて、今度は、高田が仲間の坪内雄蔵（道遥）に勧める。坪内もそれを機にスコットなどの作品に親しみ始めるという次第で、その三人が日本で最初の西洋小説通になったのだと、高田の「明治初期の西洋小説」という小文には記されている³³。当時、福沢諭吉の慶応義塾や尺振八の共立学舎などでは、実学重視の傾向が強く、小説にはまったく関心が払われなかったということだから、彼らこそは文字通り「日本で西洋小説を読んだ者の元祖の一人」と思い込んでいたところに、先ほどの「牛肉屋」会談である。実際、西洋小説通は外にも存在したのだ。

すなわちそれが高田たちの二年先輩にあたる福富孝季のグループであつたというわけである。先ほどの東京開成学校の名簿にもとづき、そのグループの顔ぶれを紹介すると、「化学 下級」の磯野徳三郎、「普通科 第一級」の千頭清臣、西松二郎、それに「普通科 第三級甲」の和田垣謙三、岡倉角蔵（寛三）といった面々である。すべて東京開成学校以来の仲間で、なかでも、福富、磯野、千頭、西の四名はとくに親しい間柄であつた。理学部に進んだ磯野と西以外は、みな文学部に進学し、同じクラスであつたことから、高田の証言にあるように、福富と岡倉が牛肉屋で文学談義に華を咲かせるといふのも別に不思議はなかつたのである。高田は、また、先ほどの「明治初期の西洋小説」の中でこんなこともいつている。「我々と前後して西洋小説を読みはじめた者は東京大学の上級に二三あつた、その人は誰かといふに今の岡倉寛三、及び既に故人となつた福富某、磯野徳三郎などといふ人達であつた」と³⁴。やはり、福富と岡倉がいて、そこに磯野の名前が加わつてゐる。私がここに名前のある三人の中でとくに福富に注目するのは、それなりの根拠があつたことである。その根拠とは福富が明治二十四年四月にこの世を去つたときに、友人・知己一同が生前の彼を偲んで発行した『臨淵言行録』という追悼文集である（臨淵は福富の号）。その追悼文集は、日本新聞社の陸羯南が編集・発行人となり、生前親しかつた千頭が「詳伝」を書き、同窓の井上哲次郎や先輩の杉浦重剛ら多数の人が故人を偲ぶ文章を寄せるといふ体裁のものだが、それを読むと、福富という人物がいかに文学を愛し、人を愛し、そして自他ともにそれを認める存在であつたかがひとと伝わってくる。なかでも注意を惹くのは、東京開成学校当時から、福富とは「兄弟も及ばぬ交り」を結んだ仲で、文芸を愛し酒を愛する「三幅対」と呼ばれていた磯野と西の追悼文である。双方合わせて四十九頁に及ぶ二人の文章には、福富の人となりから、文学の好みの傾向、共に觀賞した芝居の題目にいたるまで、実に多彩な事柄が詳細に書き留められている。いま、その中の、西洋小説愛好家としての福富の側面に注目してみると、たとえば西の一文にこんな記述がみえる。

《明治十二年頃より頻に西洋小説を読み、其真味を解し、閲覽し終る毎に、磯野氏及余には相会する毎に、其批評を物語られしが、卓説少からず。西洋小説を咀嚼したる人は、福富氏の外、幾人か在る知友中にも二、三氏あるのみ。未だ、福富氏に優れる人に出会したることなし。読書の急速なる、長篇の小説にても二日以上を費さざるべし。短文の者は数時間に終り、其記事を暗誦したるが如く物語れるには、屢々喫驚せり。》⁽³⁶⁾

この文章で注目されるのは、福富が「頻に西洋小説を読み」はじめた時期が「明治十二年頃」であったと特定されていることである。西がこれを書いたのは、明治二十四、五年のことだから、記憶もかなり新しく充分信用に足りるものと考えていい。いま明治十二年（九月）当時の東京大学の名簿を調べてみると、福富、岡倉、和田垣、千頭はすべて同じ文学部の四年級（クラスは一クラスのみ）、一方高田と坪内は二年級、そして丹乙馬は法学部の一年級の「試業未済」欄に名前がある。丹は、同年七月の期末試験を受験せずに、進級することができなかったのである。つまり、そこには牛肉屋における文学談義を可能にする面々がすべてそろっており、高田、福富双方のグループが小説体験を語り合っていたというのは、おそらく「明治十二年頃」のことであったと推察されるのである。

高田によると福富や岡倉はデュマの『モンテ・クリスト』やユゴーの『レ・ミゼラブル』で小説の味を覚えたということだが、福富はたんにフランス文学だけに親しんでいたというわけではない。なにしろ、短篇ならば「教時間」、長篇でも「二日以上を費さ」ずという速読の人である。緋いた作家は、シェイクスピアあり、ディケンズあり、サッカーあり、さらにはジョージ・エリオットあり、ゲーテありと、実に多彩なものだった。当時流行したブルワー・リットンの作品なども何一つとして読まないものではなく、読めば読んだで、リットンの作品は「虚構空想に渉るの弊なき能はず」というように、必ず読後評も忘れなかった。しかも、彼は交際範囲が広く、無類の談論好きときているので、その話しを聞いた者もいつしか同じような小説を読み漁る習慣に染まっていた。磯野が、ユゴー、リットン、ディケンズをもじって「依緑軒」と号し、西洋小説の翻訳や作品論に情熱を傾けていくのもそうした福富の影響が大きかったものと思われる。さらに、福富は高等師範学校の教師を十年近くも勤めており、教室では機会あるごとに西洋文学作品の魅力を生徒に吹きこんでいった。それらのことをすべて総合すると、彼が日本の読書界に西洋文学、とくに小説を定着させる上で果たした役割は決して些少のものではなかったということができるのである。

これは、高田や逍遙の回顧談を中心とする従来の研究からは、決して浮かび上がってこなかった西洋文学の受容史上の重要な側面であり、今後は福富や磯野が果たした（文学伝道者）としての役割にも、充分注意を傾けていかなければならないだろう。それはさておき、話をサマ

ーズに戻そう。サマーズは、福富や磯野に対してどのような文学上の感化を及ぼしたのか。それを調べるために私は『臨淵言行録』を隅から隅まで読んでみたが、サマーズはおろか、東京大学時代の英文学教師についても何ら言及は見出だせなかった。要するに、サマーズの授業は彼らの脳裏に印象を刻みつけるほどのものではなかったということになるかもしれないが、だからといって、その授業がまったく意味を持たなかったということでもないだろう。とくにサマーズによって使用されたアンダーウッドの『英文学集』『米文学集』のことを考えると、やはり彼らをして西洋文学に誘うきっかけぐらいは提供したと思われるのである。そこには、サツカレーもデイケンズもジョーエリオットもひとりおりの大家の作品は収録されている。彼らがそれらの作品を評価するにせよ、否定するにせよ、それによって独自の文学的批評眼が養われていったというのは充分考えられことである。そして、その批評眼をもとに彼ら固有の見地から広く西洋文学を読み漁り、その読後評を仲間や生徒に伝えていったとなると、彼らは単にサマーズによって渡されたタラント(財産)をそのまま次代に引き継いだだけのいわば文化的(管財人)というよりは、そのタラントを元手に日本文学の地平を切り拓いていった(バイオニア)であったということになる。山崎為徳の場合と同様、彼らは日本の近代文学界全体にとつて、またとえがたき「忠実な僕」^{しもべ}であったのである。

四 文学界への影響

新しい詩歌創造の試み

先にはサマーズの英語教育法について分析した二章の最後のところで、サマーズがその英語講義において最も重視したのは古典作家の朗読と暗誦であり、それが、受講者をして英語と日本語の間に存在する言語構造の相違を意識させることになったという趣旨のことを述べた。そして、その違いを意識するなかから、新しい演説法が生まれ、新しい詩歌創造の試みがなされていったことを指摘した。それをもう少し具体的に言うならば、サマーズの奨励した「朗読」と「暗誦」は、対象となる文章がたとえばグレーの『墓畔の哀歌』であれば、新体詩の韻律法、ハムレットの台詞ならば、ドラマの演技法、そして『ジュリアス・シーザー』のアントニーのそれであれば、政治その他の演説法、というようにそれまで日本に存在しなかった西洋起源の自己表現や感情表白の技法の開発につながる可能性を秘めるものであった。

まずは、そのうちの「新体詩」との関係に注目してみると、サマーズの文学講義と新体詩との関係が最も顕著に現れているのは、明治十五年に刊行された『新体詩抄』である。本篇は日本の新しい詩歌創造の先駆けをなすものとして近代文学史上つとに名高いものだが、これがサマ

ーズの文学講義と浅からぬ関係があったということは、本書に掲載された十四篇の西詩の翻訳(ほかに五篇の創作詩を含む)のうち、四篇がサマーズが東京開成学校の教室で取り上げた作品であったということからも推察できる(その中には、先にも指摘したとおり、ロングフェローの「人生の詩」やグレーの『墓畔の哀歌』など作中重要な地位を占める詩篇が含まれている)。作者(撰者)は、かつて東京開成学校で彼の授業を聴講した井上哲次郎と、サマーズのそばにいてその教授法を具さに観察していた外山正一、それに外山の友人で植物学を教えていた矢田部良吉の三名で、いずれも東京開成学校・東京大学の教育と深く関わっていた人たちである。その三人の作者のうち「出版人」を兼務した井上哲次郎(異軒)の言によれば、『新体詩抄』一篇を世に問う趣意は、こういうものであった。すなわち、「明治ノ歌ハ、明治ノ歌ナルベシ、古歌ナルベカラス、日本ノ詩ハ日本ノ詩ナルベシ、漢詩ナルベカラス、是レ新体ノ詩ノ作ル所以ナリ」と。要するに、旧来の和歌ともちがう、漢詩ともちがう、新しい明治の詩歌の創造を彼らは試みようとしたのである。

その言にたがわず、本篇に収められた詩は従来のもとはまったく異なる新しい趣の詩となった。今ではとても読むに耐えないような稚拙な作品も少なくないが、なかには、有名な、尚今居士・矢田部良吉のこんな詩もあった。

《山々かすみりあひの／鐘なりつゝ野の牛／徐に歩み帰り行く／耕へす人もうちつかれ／やうやく去りて余ひとり／たそがれ時に残りけり／四方を望めバ夕暮の／景色はいとゞ物寂し／唯この時に聞ゆる／飛び来る虫の羽の音／遠き牧場のねやにつく／羊の鈴の鳴る響》(40)『墓畔の哀歌』冒頭二節

ここには従来の和歌や漢詩にはみられない、数々の新工夫が看取れる。たとえば、グレーの原詩がそうであるように、文章を「句」と「節」(スタンザ)に分けたこと、また西詩のリズムを表現するために七五調を取り入れたこと等である。七五調というのは、日本の古歌にも使われていたもので、別に矢田部たちの新工夫というわけではない。しかし、昔の「法則」にとらわれずに、西詩の韻律を表現する一手段として自由にそれを用いている点で、やはり新しいといえるのである。そして、それよりなにより、画期的なのは、使用されている日本語が平易明解な日常語であったということだ。われわれは、これを口にしてみて明治十五年という旧さを感じない。たとえば、その頃流行した『花柳春話』などの翻訳小説の文章と比べてみればよくわかる。そこに使われている「曰ク誠ニ然リ」「僕若シ幸ニ卿ガ朱唇ヲ一嘗スルヲ得バ能ク安眠ニ就カンノミ」(41)式の漢文崩しの日本語とはまったく趣を異にする文章なのである。

ある意味で時代離れたともいえるこのような新しい文章が創られた原因は一体どこにあったのか。思うにそれは、井上や矢田部らのそもその出発点が、西詩の音読と暗誦、つまりサマーズ式にいうならばそれを「くりかえし朗読すること」によって、その「真髓ともいふべきリズム」を掴み取る訓練から始まっているからだと考えられる。彼らは、西洋の詩を繰り返して朗読・暗誦するうちに、漢詩にも和歌にもみられない一種独特の音律と諧調を体得していった。それが言葉の喚起すイメージとあいまってえもいわれぬ快感を彼らの心に呼び起こした。それらの原詩のイメージと音律と諧調をどのようにしたら日本の文字に移し替えることができるのか。彼らの模索はそこから始まった。井上らは、それをできるだけ忠実に再現するために、まず「西洋ノ詩集ノ例ニ倣」つて、「皆句ト節トヲ分チテ書ク工夫をほどこした。リズム感を持たせるために七五調を取り入れ、ときには押韻も試みた。そして、行文はすべて、人々の音読・暗誦に馴染みやすいように、日常平易の語をもつてした。その結果が上の矢田部の詩句にみるように、われわれ現代人にも違和感を覚えさせないほど、時流を越えた詩文となつて現われたのである。

西詩を口ずさむことに端を発し、口誦・朗吟に堪えられるようにと訳文が練られたこれらの詩は、当然の帰結として、それまでにはない反応を読書界に引き起こすこととなった。従来の物語や詩文は、文字を媒体として流行するのが常であったが、この『新体詩抄』は文字に劣らず口承をもつて伝播するという特徴がみられたのである。これが出版された明治十五年当時、十一、二歳の学童であった国木田独歩は、自ら目撃した本篇に対する世間の反応を次のように語っている。

《井上外山両博士等の主唱編輯にかゝる「新体詩抄」出づ。嘲笑は四方より起りき。而も此覚束なき小冊子は草間をくぐりて流るる水の如く、何時の間にか山村の校舎にまで普及し、『われは官軍わが敵は』てふ没趣味の軍歌すら、到る処の小学生徒をして、足並み揃へて高唱せしめき。又其のグレーの「チャルチャード」の翻訳の如きは、日本に珍らしき清爽高潔なる情想を以てして、幾多の少年に吹き込みたり。斯くて文界の長老等が思ひもかけぬ感化を、此小冊子が全国の少年に及ぼしたる事は、当時一少年なりし余の如き者ならでは知り難き現象なりとす。》(国木田独歩「独歩吟序『抒情詩』より」)

この独歩の一文が示すとおり、『新体詩抄』に対する反応は、一つは「嘲笑」、一つは、はやり歌に対するのと同じような熱烈な「歓迎」というように、両極に別れた。なかでも注目されるのは、それを受け容れたのが全国の「小学生徒」たちであり、彼らは「足並み揃へて高唱」する

ほどの歓迎ぶりを示したということである。同じ体験は、蒲原有明の回想にも語られている。有明によると、彼は十一歳のおり、竹内隆信編の『新体詩歌』の翻刻本を手に入れて、姉と二人で「何がなしに集中の詩を暗誦し」た（当時は版權が確立しておらず、井上たちの詩を収録した数多くの類似本が出回ったのである）。なかでも彼が好んで口にしたのは先に掲げた矢田部の「グレー氏墳上感懐の詩」で、「やがて羊の鈴がきこえ、梟が月に訴えるというその詩のはじめの方の句が、今でもきれきれながら口拍子にのって、思わず吟じ出される⁽⁴³⁾ことがある」といつている。

それを口ずさんだのが全国の「小学生徒」であったということは、裏を返せば、井上らの「新体」の詩が小学生の暗誦にも堪えるような平易・流麗な日本語であったということになる。旧派の伝統に支配された当時の文学作品の中で、小学生にも口ずさめるような平易な日本語が使用されるというのは異例中の異例であったという外はない。少なくとも、明治二十年代の中頃までは、物を書くにはかならず手本とすべき文章の型があつて、その範囲内ですべてが処理されていった。それは、翻訳文学の世界にあつても、変わりはなく、小説の翻訳であれば、用いる文体は「漢文崩し」体か「馬琴」調、あるいは「魯文、種彦」風、戯曲の翻訳の場合ならば「院本」口調というように、だいたい相場が決まっていた。それが、日本の社会に深く根を下ろした伝統芸術と密接に関わるジャンルであればあるほど、従来のコンヴェンションの枠にとられ、自由な発想で西洋の作品と取り組んでいこうとする姿勢に欠ける傾向があつたのはいうまでもない。たとえばシェイクスピアなどの古典演劇の翻訳がその好い例で、逍遙のような先覚者でさえも、「外国文学の翻訳には、比較的現代語が最良だ」という「以前にも既に心付いてゐた事を今更のやうに明かに自覚⁽⁴⁴⁾」したのはすでに晩年の域に近づいてからのことであつた。ましてや明治十年代の段階で、小学生の口の端に上るような日本語で翻訳を試みるというのは、旧来の伝統芸術に馴染みをもつ人間であればあるほどできなかったのである。「新体詩抄』に対する「文界の長老」たちの反応が、冷たいというのを通り越して「嘲笑」的であつたというのも当然の成りゆきであつたことになる。

しかし、時代の流れからいえば、奇跡とも思われるそうした「新体」の詩は現実⁽⁴⁵⁾に世に問われ、「文界の長老」たちの「思いもかけぬ感化」を日本の社会にもたらしていった。それを可能にした理由としてまず考えられるのは、そのジャンルの詩が日本には存在しなかつたということである。要するに、それは漢詩でもない和歌でもない、「少しく連続したる思想」を表現する新しい分野の詩であつたために、旧来の枠組みにとられずに自由に新しい詩のあるべき姿を追求することができたのだ。そして、もうひとつ、それを試みた作者がみな英語に堪能で、西詩を繰り返し口ずさむというところからその詩歌創造の発想が生まれたということも大きかつた。第二章にも詳述したように、その朗読・暗

誦の習慣を日本の教場に定着させた最大の功労者が、サマーズであったということは、彼が日本の社会に与えた貢献には二重の意味で忘れてたいものがある。つまり、サマーズは、日本の新しい詩歌創造のきっかけを提供したばかりか、それを口誦・朗読する全国の「小学生徒」の「清爽高潔なる」詩情を育むことにも一役買ったのである。旧派の伝統にとっぷりつかり、耳慣れない響きの「新体」の詩を「嘲笑」するだけの「文界の長老」たちにとってはそれこそ思いもかけぬ感化であった。

新しい演劇運動への波動

さて、新体詩に関することはこれぐらいにして、今度はサマーズの英語教育法、そのなかでも古典作家の朗読と暗誦を重んじた教育法が、新しい日本の演劇運動に投げかけた影響に目を転じてみることにしよう。日本の新劇運動の端緒は、サマーズが東京開成学校を去るのに入れ代わりに同校に入学し、そこで英語・英文学を修めた坪内雄蔵によつて開かれる。サマーズが去った教場で、サマーズの残したアンダーウツドの教科書により西欧文学への洗礼を受けた坪内は、長じて、自らが日本の教壇・論壇の主導者として世に立つや、早速「朗読会」を設立し(明治二十四年)、その活動の一環として「読法を興さんとする趣意」(『小羊漫言』明治二十六年刊)という一文を発表する。彼がそこで提唱する「読法」というのはたんなるありきたりの朗読法ではない。文法・修辭・論理に気を配りながら言文一致の文章を読んでいく独自の「読法」であった。それを名づけて「論理的読法」という。その彼の考案になる「読法」を実践することから得られる利点とは、逍遙になれば、第一に、「人間研究」にもたらず測り知れない効果であるという。この「論理的読法」によつて、君子を読もうとすればまず君子の心を理解する必要がある。シャイロックの台詞を読むときは、剛愎堅忍執拗なる性格を、マクベスならば、邪念燃ゆるがごとき賊臣の心を理解して始めてそれが可能になる。つまりその朗読をとおして「人間の性情を探り天命の一端を窺ひ知る」ことが可能になるというのだ。彼が「叙記」の文に重きをおかず「脚本」に重点をおいているのはそのためである。⁽⁴⁵⁾

逍遙は、その朗読法がたんなる俳優養成の手段と受けとめられるのを嫌つて、「人間の性情を探り天命の一端を窺」がう目的の方を中心に論理の展開をはかっているが、彼本来の目的が新しい演劇界の興隆にあったことは、同じ「読法を興さんとする趣意」中の次の一文からも明らかである。すなわち、「ドラマは元と俳優に伴ふべきものなり。然るに今や文園、戯曲を興さんとする時に当りて、汝ドラマを作るとも、俳優は之を演ぜざるべし(具にいば汝の作を有形にし解釈し説明する者絶えて無し)、……我所謂朗読法の本願は人性研究にありと雖も、其第二の誓願は、此欠乏を補う」⁽⁴⁶⁾にある、と。その当時の劇壇というのは、作家がいくら骨を折つて新しい脚本を世に問おうとしても、それ

を演じる真の俳優が存在しないという状態にあった。彼の「読法」は、人間性研究に資するという本来の狙いとは別に、この欠を補い未来のシエイクスピア、未来のゲーテの「説明者」「批評家」を世に生み出すことに大きく貢献しようという願いの込められたものであった。そのことは、後に彼が「脚本の朗読法」という文章の中で、次のように回想しているのをみても分かるだろう。

《西洋では、前にいつた如く、エロキューションが二千何百年も前から研究されてゐたから、それが完全かどうかは別問題として、とにかく備はつてゐる。我が国にはさういふものが一つもない。……私は、今から三十余年の昔、何とかして此欠陥を補ひたいものと思つて（一は作劇修行の便宜にもなるからと思つて）、いろいろと工夫した結果、朗読会を起した。其際の私の意見の一端は『小羊漫言』中に書いておいた筈である》⁽⁴⁷⁾

逍遙の朗読法に関する知識がどこに由来するかといえ、それは学生時代の講義と自ら西洋の書物をとおして学んだものをおいて外には考えられない。彼は、上の文章に続けて、「其頃は西洋のエロキューションとても、只幾らか英書によつて読んでゐたばかりである」と、自らの知識がごく限られたものであったことを認めている。そうした西洋の書物をとおして学んだ知識と、学生時代に外国人教師から受けた文学作品の読み方指導、それが逍遙の数少ない朗読法に関する知識の源であった。逍遙は、サマーズの直接の薫陶を受けることはなかったが、彼が残していった「朗読」「暗誦」「重視」の授業の流れの中で、英語を学び英文学を修めた。それが、同校に学んだ幾多の俊秀同様、彼をして真の西洋文化・西洋言語への覚醒を促し、同時に日本の文化と言語に対する深い省察へと導くことになったのである。このように、当時の東京開成学校・東京大学の授業には、そこに学んだ学生が、やがて新生日本に相応しい新たな技術や制度、芸術・文化を模索する立場にたつたとき、その知識や発想の拠り所ともなるような数多くのヒントやきっかけが随所にちりばめられていたのである。

読み継がれたアンダーウッドの『英文学集』

明治九年八月三十一日、サマーズは東京開成学校を満期解任となる。しかし、サマーズは去つたが、サマーズの使用したアンダーウッドの『英文学集』は残った。彼に代わって東京大学予備門・東京大学の教場で英語・英文学を担当したのは、マリオン・スコット、ウィリアム・ホートン、ウィリアム・コックスといった人々であったが、彼らも、サマーズ同様、英語・英文学のテキストとしてアンダーウッドの『英文学集』を積極的

に利用していった。取り上げる作品は、英詩、評論、講演文とそれぞれ教師によって異なつてはいたが、その朗読をとおして英語の文体・リズムに親しませるといふ教え方の基本は変わらなかつた。明治十五年当時、文学部・理学部で英語・英文学を担当したユックスの「申報」にはこうある、「アンダーウッド氏著英文学書中ヨリ抜粹セルモノヲ習読セシメ、而シテ其章句ヲ変体シテ解釈セシメ、殊ニ慣用ノ文体句調等ニ関スルモノハ反復丁寧ニ教導セリ」と。⁽⁴⁸⁾どことなくサマーズの教育法を彷彿とさせるきめの細かい指導法である。

一方、東京開成学校・東京大学以外の学校でも、アンダーウッドの『英文学集』は英語・英文学のテキストとして盛んに利用されていった。たとえば、サマーズ自らが出講に及んだ札幌農学校もその一つ。ここでは、東京開成学校のとく同様、グレーの『墓碑の哀歌』やゴールドスミス『見捨てられた村』(The Deserted Village)等、日本人の詩情にも一脈通じる平易・純朴な詩が好んで読まれたが、それらはみな、明治十年代から二十年代にかけて日本全国の中等・高等教育の現場に広く浸透し、明治期屈指の流行作品となつていったものである。サマーズの講義はそうした流行の先駆をなすものとしても充分注目に値する。

その外、サマーズとは直接関係のない同志社などでも、アンダーウッドの『英文学集』が使用されたという報告がある。それをういたのは同校の「最初の教師」デビスで、彼は組織神学が専門であつたが、英語や英文学も担当し、その中の「五年生」に用いた教科書の一つに、「アンダーウッドの『英文学集』」があつたと、重久篤太郎氏の『お雇い外国人——教育・宗教』⁽⁵⁰⁾は伝えている。

同様に、坪内逍遙の教えた東京専門学校でも、開設当初からそれはテキストとして用いられていた。同校の明治十五年度の学科目表をみると、そこには「英学科」の「本科第三級」の「読法」のテキストとして「アンダーウッド氏英国大家詩文集」が使われた旨が記されている。⁽⁵¹⁾しかも、注目すべきことに、それが使用されたのは、英語の「読法」を訓練する教科書としてであつた。当時の「英学科」の講義要項によれば、英語の授業には、「講義」「輪講」「読法(＝読法)」の三種類があつたということだが、そのうちの前二者が、「字義ノ解釈ヲ善クセシメンガ為メ」の授業であるのに対し、最後の「読法」は「字音ヲ正シ英語ノ精神ヲ知り書籍ヲ捷読スルニ便ナラシメンガ為メ」の授業であつた。つまり、ここでも、英語の発音を正したり文体やリズム等に馴染ませるための「朗読」「暗誦」のテキストとして本書は使用されていたのである。

このように私学・官学を問わず、全国の有力校の教場へと浸透していったアンダーウッドの『英文学集』であつたが、それは同時に当時の文藝界にも深く浸透しその影響の跡を随所にとどめていった。日本の近代文学の進展は、少なくとも明治二十年代の段階までは、若き文藝のエリートたちの西洋文学に対する理解の深まりと、ほぼ同一の軌跡を刻んでいたといつても過言ではない。とくに近代日本文学の黎明期ともいふべき明治十年代にあつては、東京大学の教場で講じられた文学とそれを学んだ人々の文芸上の試作が、そのまま日本全体の文学

上の試みと同一視しうるほどの密接な関連が認められる。ということは、そこで最も頻繁に用いられたアンダーウッドの『英文学集』が草創期の文学作品に影響の跡をとどめないという方がむしろ不思議であったということになる。ときにそれは、日本の新しい詩歌創造のきっかけとなることもあれば、ときに、『当世書生気質』のような、新しい小説の素材の提供源となることもあった。『当世書生気質』というのは、人も知るように、当時の新興書生の生活を題材に、新しい小説理論『小説神髓』の具体化を計ろうとして試みられた逍遙の最初の創作小説である。そのはじめの部分(第二回)に、おそらく逍遙の学生時代の実体験を写したものだろう、学生が牛鍋をつつきながら仲間が悪口に花を咲かせる場面があるが、その中に、ある男が仲間にも本を貸したはいがいつまでも返さない、きつと質屋に入れるか売り払ってしまったに相違ないといって慨嘆するところがでてくる。その本こそ何あるう「アンダーウッド(英文大家文章)」であった。逍遙の脳裏には、当時の学生生活を描くのに、アンダーウッドの『英文学集』はなくてはならぬ書物として意識されていたのである。

逍遙とアンダーウッドの『英文学集』の浅からぬ因縁を物語る証拠は外にもある。たとえば、本邦最初の本格的な文学論となった『小説神髓』には、スペンサーの『妖精の女王』、マコーレーの「ヘイスティングス弾劾文」、サッカーの『ジョージ四世』、『十八世紀滑稽家伝』等々、同書に収められた作品や作家の名前が随所にちりばめられている。この傾向は、逍遙の東京専門学校の講義にもそのままあらわれて、東京専門学校ではアンダーウッドの『英文学集』中の作品は最も頻繁に教室で取り上げられる作品の一つとなっていた。それを証明するのが、彼が同校で講じた作品を講義録風にまとめた『英詩文評釈』^(註)という書物である。その冒頭を飾る三章はいずれも『英文学集』に由来する作品、すなわち、クーバーの「ジョン・ギルピン」、ベーコンの「学問につきて」、ドライデンの「アレクサンダアの盛宴」によつて占められている。アンダーウッドの『英文学集』は、逍遙の創作、演劇活動ばかりか、研究活動をも支える一つの重要な拠り所となっていたのである。

逍遙だけではない。この時代の高等教育機関で英語・英文学を学んだほどの文学者・研究者ならば、彼らの残した作品や文献・資料の中にアンダーウッドの『英文学集』とのつながりを証明する何らかの証拠を見つけ出すのはそう困難なことではない。たとえば、山田美妙が「大学入学試験受験許可願」に添付した「廿歳にして既に読破せりと称する書目」^(註)の中には「アンダーウッド文学書」の名がみえるし、内田魯庵の『文学者となる法』という風刺作品には「Happy insect, happy thou」^(註)で始まるエイブラハム・カウリーの詩の引用が見られる(細部は多少異なることもある)、あるいは増田藤之助の『英文評釈』にもトマス・グレーの『墓畔の哀歌』の訳注の掲載がある、といったことである。明治七、八年から二十年代半ばにかけて文学を志す日本の知識人に最も大きな影響を与えた洋書を一冊挙げるとすれば、間違いなくアンダーウッドの『英文学集』もその最も有力な候補の一つということになるだろう。いまだ西洋文学の何であるかもよく分かっていなか

つた当時の知識人たちが真の文学へと導いた『英文学集』の役割は決して些少なものではなかったと思われる。とりわけ、われわれが注意を傾けなくてはならないのは、本書が、西洋式の「朗読法」と一体になって普及していったという点である。それを「朗読」「暗誦」するなかからはじめて日本人の西洋言語と西洋文化への覚醒、裏を返せば、日本の言語と文化に欠けているものへの自覚と新たな創造への第一歩が生まれていったのだ。アンダーウッドの教科書が、あるいはそれを用いて西洋文学の基本を説いたサマーズの講義が、日本文学の近代化に果たした役割にわれわれはいくら関心を注いでも注ぎ過ぎることはないのである。

【注】

- 1 明治七年当時、英語学校が存在したのは、東京、愛知、大阪、広島、長崎、新潟、宮城の七府県であった。詳しくは、桜井役『日本語教育史稿』（敵文館、一九三六年三月）参照。
- 2 「東京開成学校（明治六年）」（『文部省年報』収録）による。同資料は復刻版『東京大学年報』第一卷（東京大学出版会、一九九三年三月）に収録されており、本稿はそこからの引用。
- 3 『東京開成学校第二二年報 明治七年』（序文の日付は明治八（一八七五）年四月）一六頁。前掲の復刻版『東京大学年報』第一卷、一一頁参照。
- 4 前掲書、四六頁。同復刻版、一九頁参照。
- 5 各教員の雇用の時期に関しては、明治八年の英文『東京開成学校一覧』中の「教授リスト」（二六一―一八頁）によった。本書の欧文タイトルは以下のとおり。
The Calendar of the Tokio Kaisai-Gakko, or Imperial University of Tokio for the Year 1875, published by the Director, 1875.
- 6 重久篤太郎「日本英文学研究の先駆／ジェイムズ・サマーズ」『日本近世英学史（増補版）』（名著普及会、一九八二年十一月）三五―一頁からの引用。
- 7 重久、前掲書、三五―一頁。
- 8 同書の出版事項については、注5を参照。
- 9 英文『東京開成学校一覧 明治八年』、六一―六二頁。

- 10 前掲書、一〇五—一〇六頁。
- 11 『東京開成学校／文庫書目／英書之部』(一八七五年)。本書は和文の標題以外はすべて英文。英文の書名は、*A Classified List of the English Books in the Tokio-Kaisei-Gakko*。本リストの「文学」の項は、四部門(文学史)「文例集」「読本」「随筆ほか」に分けられ、全部で五五点の書名が掲載されている。
- 12 『東京開成学校第二年報 明治八年』(序文の日付は明治九(一八七六)年三月)三二頁。前掲の復刻版『東京大学年報』第一巻、三二頁参照。
- 13 モーレーの書物に関しては「随筆ほか」の項に「MORLEY'S Paissey the Potter」という書物の記載がみえるが、これは『文学史』と直接関係するものではない。
- 14 国会図書館の検索カードには、同書の一八七一年版も所蔵とあるが、同版については目下行方不明とのことで筆者はそれを目にすることができなかった。
- 15 *The Calendar of the Tokio Kaisei-Gakko, or Imperial University of Tokio for the Year 1876, published by the Director, 1876, pp.119-120.*
- 16 *Ibid.*, p.104.
- 17 *Francis H. Underwood, A Hand-Book of English Literature, American Authors, Lee and Shepard, 1875.* 序文の日付は一八七二年六月とあるところから、同年の刊行と思われる。
- 18 *Fifth Annual Report of Sapporo Agricultural College, 1881, p.36.*
- 19 武信由太郎「余の英語研学談」『英語世界』三巻一号(一九〇九年一月)四六頁。
- 20 重久篤太郎、前掲書、三六六頁より引用。
- 21 *Fifth Annual Report of Sapporo Agricultural College, 1881, p.36.*
- 22 『東京開成学校一覽 明治九年』九—一二二頁。
- 23 英文『東京開成学校一覽 明治八年』一六〇—一七六頁。
- 24 重久篤太郎、前掲書、三六六頁より引用。
- 25 『郵便報知新聞』(一八八二年四月二四日)。
- 26 柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』(春秋社、一九六一年九月)四五三—六〇頁。
- 27 田中啓助編『熊本英学史』(本邦書籍株式会社、一九八五年九月)一四〇頁。引用文は本書「第二部」「第二章 中原淳蔵と原田助」(古

澤基生氏執筆)の中の一節。

- 28 三宅雪嶺「自伝」『大学今昔譚』(我観社、一九四六年一月)一二三頁。
- 29 柳田泉、前掲書、四五四頁。
- 30 柳田泉、前掲書、四五四頁。
- 31 柳田泉、前掲書、四五五頁。
- 32 高田早苗『半峰昔ばなし』(早稲田大学出版部、一九二七年一〇月)四九頁。
- 33 高田早苗『明治初期の西洋小説』『早稲田文学』(金尾文淵堂、一九〇八年一〇月)五一―五二頁。
- 34 高田早苗、前掲文、五二頁。
- 35 陸實(羯南)編集『臨淵言行録』(陸實発行、一九九二年三月)一九頁。
- 36 「生徒姓名」『東京大学法理文学部一覽 明治十二、十三年』(丸家善七、一八八〇年三月)七二―一〇一頁。
- 37 磯野には依緑軒の名を付してユゴロ、リットン、ディケンズの作品について語った次の著書がある。無腸道人(磯野徳三郎)『依緑軒漫録』(日本新聞社、一八九三年九月)。
- 38 福富が教室で取り上げた文学作品については、彼の教え子の一人である遺澤恒猪が、陸實編の前掲書に寄せた「逸事の七(福富先生)」(五四―七七頁)の中で、詳しく述べている。
- 39 外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎『新体詩抄』(丸家善七、一八八二年八月)一五丁。
- 40 外山ほか、前掲書、七―八丁。
- 41 丹羽純一郎訳『欧州/奇事 花柳春話』初編(高橋源吾郎、一八七八年一月)一二―一三頁
- 42 国木田独歩「独歩吟序」『明治詩人集(一)』明治文学全集60(筑摩書房、一九七二年二月)五一頁。
- 43 木村毅「日本を変えた書物」『丸善外史』(丸善、一九六九年二月)一八七頁より引用。同様の趣旨は矢野峰人の「蒲原有明伝―詩人の生ひ立ち―」(『蒲原有明研究(新訂版)』、日本図書センター、一九八四年九月)の中にも記されている。
- 44 坪内逍遙「自分の翻訳に就いて」『逍遙選集』別冊五(第一書房、一九七八年二月)二五六頁。この一文の収録された『シェークスピア研究』が出版されたのは、一九二八年二月であった。
- 45 坪内逍遙「読法を興さんとする趣意」『小洋漫言』(有斐閣書房、一八九三年六月)一四一―四三頁。
- 46 坪内、前掲書、一五〇頁。

- 47 坪内逍遙「脚本の朗読法」『逍遙選集』11巻（春陽堂、一九二七年二月）。
- 48 『東京大学第三年報 起明治十五年九月／止同十六年十二月』（序文の日付は明治一七年七月）二四五頁。
- 49 明治期のゴルドスマスの流行については次の拙稿参照。川戸道昭「オリヴァー・ゴルドスマスと日本の近代——明治期の『荒村行』解釈の変遷をめぐって——」『人文研紀要』12号（中央大学人文科学研究所、一九九一年八月）。
- 50 重久篤太郎『お雇い外国人——教育・宗教』（鹿島研究所出版会、一九六八年一〇月）六八頁。
- 51 『東京専門学校年報 明治十五年度』（早稲田大学出版部複製、一九八二年一〇月）八頁。同頁に綴じ込まれた科目表のうち「英学科」の科目表参照。
- 52 坪内雄蔵『文学／叢書 英詩文評釈』（東京専門学校出版部、一九〇二年六月）。
- 53 塩田良平『山田美妙研究』近代作家研究叢書72（日本図書センター、一九八九年一〇月）二三一—二四頁。
- 54 宮沢俊三（実は内田魯庵）『文学者となる法』（右文社、一八九四年四月）一八〇—一八一頁。
- 55 増田藤之助講述『英文評釈』（無刊記、中扉に「東京専門学校蔵版」とある）。増田の本詩の訳題は「悲歌」。